

# グループにおけるいじめに関する研究の動向

臨床心理学コース 和 智 遥 香

A review of studies on group and bullying

Haruka WACHI

In recent years, with the emergence of concepts such as “school caste”, attention has been focused on “group” within the class. Although the relationship between group and bullying is being investigated, the possibility of investigating bullying from the perspective of group has not been sufficiently examined. Therefore, the purpose of this study is to examine the possibility of investigating bullying from the perspective of group. As a result, relational aggression, which is difficult for teachers to see and understand, can be investigate from the group’s perspective, and it can be possible to focus on bullying that has a serious impact on the victim, and to lead to a multifaceted understanding.

## 目 次

第1章	いじめの先行研究の概観
A節	学校におけるいじめ
B節	いじめの定義と種類
C節	いじめの影響
D節	集団への着目と介入
第2章	先行研究の課題と本研究の目的
A節	先行研究の課題
B節	本研究の目的
第3章	グループに関する研究の概観
A節	定義
B節	グループの特徴
C節	発達の変化
D節	スクールカースト—近年注目が集まっているグループ概念
E節	まとめ
第4章	関係性攻撃に関する研究の概観
A節	定義
B節	発達の変化
C節	心理社会的適応との関連
D節	介入
E節	まとめ
第5章	考察
A節	グループにおける関係性攻撃
B節	本研究の限界

## 第1章 いじめの先行研究の概観

### A節 学校におけるいじめ

近年いじめ問題は学校や職場など様々な場面で取りざたされている。その中でも友達同士でのいじめは幼少期の不適切な養育と同程度に、あるいはそれ以上に若年成人の自殺を含むメンタルヘルスに対して悪影響を及ぼすことが示されており<sup>1)</sup>、学校での友人間でのいじめは特に深刻な問題であると考えられる。

友人関係とは対等性、自発性、相互互惠性によって特徴づけられる関係であり<sup>2)</sup>、特に青年期は親との関係よりも友人との関係が重要になる。その時期の友人関係には安定化機能、社会的スキルの学習機能、モデル機能などの正の側面がある一方で<sup>3)</sup>、いじめのような負の側面も存在する。

このように青年期、つまり中高生では友人関係が重要になるために、友人関係の負の側面の影響も大きくなると考えられる。そこで本研究では中高生の学校における友人間でのいじめに焦点化する。

### B節 いじめの定義と種類

いじめは文部科学省によって「①児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人間関係のある他の児童生徒が行う②心理的又は物理的に影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、③当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの④なお、起こった場所は学校の内外を問わな

い」と定義されている<sup>4)</sup>。令和2年度のいじめの認知件数は517163件であり、前年度に比べて減少傾向であったものの依然として高い水準を保っている状況である<sup>5)</sup>。いじめの具体的な内容としては前述の調査<sup>6)</sup>では「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」「仲間はずれ、集団による無視をされる」「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする」「金品をたかられる」「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする」「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる」「その他」の9つが挙げられており、いじめの中には多様な行為が含まれる。

令和2年度の調査<sup>6)</sup>ではその中でも、「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」「仲間はずれ、集団による無視をされる」が多くみられることが示されている。また下田<sup>7)</sup>も日本で起こりやすいいじめとして「いやなあだ名や冷やかしか・からかい」「陰で悪口を言われる」「言語的攻撃」「噂流し/ノート廻し」を挙げており、日本ではからかいや悪口、無視、仲間はずれなどの非暴力的ないじめが起こりやすいと考えられる。

このようにいじめを具体的な行動として捉えることも可能だが、攻撃行動の類型を用いて捉えることも可能である<sup>8)</sup>。攻撃行動には複数の分類の仕方が存在するが、攻撃行動の内容に着目した分類では身体を用いて危害を加える身体的攻撃、言語を用いて危害を加える言語的攻撃、関係性を用いて危害を加える関係性攻撃に分類を行う。この分類に従うと、日本では言葉を用いた言語的攻撃や仲間との関係を用いた関係性攻撃が起こりやすいと考えられる。

### C節 いじめの影響

いじめは被害者のメンタルヘルスへの影響が指摘されている。例えば岡安・高山<sup>9)</sup>はいじめが短期的には身体的な反応と、抑うつや不安などの精神的な反応に繋がることを示している。またいじめの被害と自傷行為<sup>10)</sup>、自殺念慮や自殺企図との関連も示されており<sup>11)</sup>、より深刻な問題に繋がる可能性もあることがうかがえる。さらにいじめの被害はメンタルヘルスへの長期的な影響も示されている<sup>12)</sup>。

またいじめは外在化問題にも影響を及ぼすことが指摘されており、いじめの被害にあうことで攻撃性が高

まったり<sup>13)</sup>、たばこ、アルコール、ドラッグの使用が増えることが示されている<sup>14)</sup>。

このようにいじめは被害者に負の影響を及ぼすが、加害者にも負の影響があることが指摘されている。例えば加害と抑うつ<sup>15)</sup>や不安との関連が示されている<sup>16)</sup>。またいじめの加害と心理社会的不適応の長期的な関連も指摘されており、いじめを行ったことがある者が大人になってから中程度から重度の内在化問題を経験する傾向にあることが示されている<sup>17)</sup>。

以上からいじめは短期的にも長期的にも心理社会的不適応をもたらすと考えられる。また被害者と加害者の双方にとっていじめの影響は深刻なものであることがうかがえ、適切な介入が必要である。

### D節 集団への着目と介入

近年ではいじめを集団で捉える考え方が主流になっている。例えば日本では森田・清永<sup>18)</sup>のいじめの四層構造が有名であり、加害者・被害者・観衆・傍観者という4つの役割のもとでいじめを捉えている。また諸外国ではparticipant roleという考え方が提唱されており、加害者と被害者を含めた6つの役割が想定されている<sup>19)</sup>。

これらの理論からは加害者と被害者以外の行動が重要であると考えられ、特に傍観者を仲裁者に変えることに注目が集まっている。「KiVa」を始めとした傍観者に着目したプログラムも数多く作られておりいじめの減少などに対して一定の効果を示しているが<sup>20)</sup>、依然としていじめはなくなっていない。このことから傍観者へのアプローチとは異なる新たな視点が必要な可能性がうかがえる。

## 第2章 先行研究の課題と本研究の目的

### A節 先行研究の課題

以上中高生の学校におけるいじめに関する研究を概観した結果、いじめを集団で捉える考え方が主流になっており、傍観者を対象とするアプローチが注目されて一定の効果をあげていることがうかがえた。一方で依然としていじめはなくなっておらず、現状の集団の捉え方やそれに伴う傍観者アプローチには限界点もあるのではないかと考えられる。

集団と一概に述べたとしても生徒は学校生活を通してクラスや部活など様々な集団に所属している。その中でもクラスは学校生活の多くの時間を過ごす場であるため、これまでのいじめ研究ではクラスという集団

に着目していじめを捉えることが多かった<sup>21)22)</sup>。しかし餅川<sup>23)</sup>がクラスの視点からいじめを捉えることは説得力を持つが、現実の子どもの世界には本来の学級集団は存在せず、その中にあるグループが重要であると指摘していたり、鈴木<sup>24)</sup>がクラス内のグループがいじめの温床であると指摘しているなど、経験的にはグループという視点からいじめを捉えることの重要性が示唆されてきた。

そのような中で近年ではスクールカーストという概念が登場し、クラスのグループに注目が集まっている。スクールカーストはいじめとの関連が指摘されており、いじめを検討する際にグループの視点を取り入れられるようになってきているが、グループ視点でのいじめの検討は未だに少ない状況である。

## B節 本研究の目的

前節ではグループという切り口からいじめを捉えることの重要性が示唆されたが、グループの視点からいじめを捉えることについて十分に検討が行われていないことがうかがえた。そこで本研究では中高生のクラスでのいじめについて、グループという視点から捉えることの可能性について検討することを目的とする。そのために本研究では「グループ」と「いじめ」のそれぞれの概念について整理を行い、最後にそれらを総合してグループという視点からいじめを捉えることの可能性について考察する。

なお、前述の通りいじめには多様な内容が含まれているが、日本では言語的攻撃や関係性攻撃が起りやすく、特に青年期は身体的攻撃や言語的攻撃の減少に伴い関係性攻撃が台頭してくる時期である。したがって、日本の中高生のクラスでのいじめを検討するに際しては関係性攻撃が重要と考えられることから、本研究では関係性攻撃に焦点化して検討を行うことにする。

## 第3章 グループに関する研究の概観

本章ではグループについて、定義、特徴、発達的变化の観点から概観する。また近年注目を集めており、いじめとの関連が示唆されているスクールカーストについても取り上げる。

### A節 定義

グループには複数の定義が存在する。例えば山中<sup>25)</sup>はグループを「同じ学級の児童・生徒で構成された、休み時間などの時間になると、いつも一緒に過ごす児

童・生徒の集まりのこと」と、石田・小島<sup>26)</sup>は「学校で一緒に教室移動したり休み時間に一緒にいるような決まった友人グループ」と定義している。これらの定義には多少異なる部分もあるものの、どれも学校生活において一緒に過ごす時間が長い集団に言及しており、グループとは学校生活で長い時間をともにする集団を指すことがうかがえる。

一方でグループに固定的な定義を用いていない研究もしばしばみられる<sup>27)</sup>。このことから特に定義をしなくても生徒には「グループ」という言葉から思い浮かべる特定の集団があることがうかがえ、グループの存在が一般的なものになっていることがうかがえる。

### B節 グループの特徴

中高生のグループへの所属率は高く、男女ともに8割程度の生徒が所属していることが示されている<sup>28)</sup>。一方でグループは女子に顕著であることが経験的に指摘されており、研究でも女子のグループに焦点が当たることが多く、女子グループの特徴に関する知見が多く示されている。

例えば多和<sup>29)</sup>は女子のグループの特徴として、親密度が高く居心地がよく他者配慮がある場所であることを指摘している。また須藤<sup>30)</sup>はグループは自己開示や相談をすることができる場であったことを示しており、女子にとってグループは学校での居場所であると考えられる。

しかしグループには良い面ばかりではない。幸本<sup>31)</sup>は女子グループの特徴として、①グループが固定的であること、②グループが閉鎖的であり、他のグループのメンバーに対して排他的であること、③グループはメンバーのパーソナリティの一部であると考えられること、④グループの存在は必ずしも歓迎されていないこと、⑤グループ間に力関係があることを指摘している。また野里・横山<sup>32)</sup>では女子は積極的な理由だけでなく、孤立を回避するという消極的な理由によりグループに所属していることが示されている。このように特に女子のグループは固定的、閉鎖的であり、居心地が悪い側面もあると考えられる。またクラスでの孤立を回避するために仕方なく所属している側面もうかがえる。

このようにこれまで女子グループに着目した検討が多い傾向にあるが、グループの特徴について性差を検討した研究もいくつか存在している。それらでは上述の特徴が女子に顕著であることが示される一方で<sup>33)</sup>、男子にも孤立回避など同様の傾向が示される場合もあ

り<sup>34)</sup>、多少の男女差はあるものの男女ともにクラスにおいて孤立を回避するためにある程度固定的なグループに所属していることがうかがえる。

### C 節 発達の変化

青年期の仲間集団は発達の観点ではギャンググループ、チャムグループ、ピアグループの3つに分類することができる<sup>35)</sup>。ギャンググループは小学校の中学年以降にみられる同性同年齢の集団であり、外面的な同一行動によって一体感を得ることが特徴的である。チャムグループは中学生にみられる同性同年齢の集団であり、言葉で内面的な類似性を確認して一体感を得ることが特徴的である。ピアグループは高校生にみられる集団で、共通性や類似性だけでなく異質性も認め合うことができ、互いの価値観を認めることが特徴的である。

このように仲間関係は類似性を重視するものから異質性を認め合うものに発達していくと考えられる。しかし近年ではグループの発達は必ずしも上記のような過程を辿らず、放課後の外遊びの現象により遊びを共有するギャンググループが消失し、そのかわりにチャムグループが肥大化してピアグループが遷延化していることが指摘されている<sup>36)</sup>。またチャムグループが肥大化しているといっても多様な仲間集団での相互作用を経験していない者が作る集団はチャムの性質が極めて薄められたものであり<sup>36)</sup>、Sullivan<sup>37)</sup>が指摘するような児童期の歪みを修正する関係には程遠いと考えられる。

このように近年の環境の変化によって仲間集団の発達も変容し、チャム的な関係性が薄められたかたちで長期化し、なかなか他者の異質性を認めることができるグループを形成することが難しい状況にあることがうかがえ、グループの風土がよりいじめが起りやすいものになっていると考えられる。

### D 節 スクールカースト—近年注目が集まっているグループ概念

近年注目が集まっているグループの概念として、「スクールカースト」が存在する。元々はネット上で使われはじめた言葉であるが、近年では学術的にも注目を集めており、「クラス内の生徒の高低を要因としてあらわれる人間関係の序列構造」と定義されている<sup>38)</sup>。

スクールカーストはいじめと関連があることが経験的に指摘されており、森口<sup>39)</sup>はいじめを読み解くためにスクールカーストを導入している。つまりこれま

で学術的にはクラス単位で捉えられてきたいじめにグループという概念が導入され、グループを通したいじめの理解が広まりつつあると考えられる。しかし一方で水野・加藤・太田<sup>40)</sup>が行った実証研究ではスクールカーストといじめ加害、被害の関連は有意であったものの関連の程度がかなり弱いことが示されており、グループ間の地位といじめの関連性は実質的な意味がないことが指摘されている。スクールカーストによりいじめとグループの関連が意識されるようになったものの、その関連は実証研究では支持されなかったことから、グループという枠組みでの捉え方については更なる精査が必要といえる。

### E 節 まとめ

グループに関する研究の概観からは、生徒には男女ともに「グループ」という独特の固定的な集団が存在することがうかがえた。またそのグループはこれまで発達の観点から指摘されてきた仲間集団とも異なる面があると考えられる。チャムグループが肥大化しピアグループが遷延化していることが指摘されているが<sup>41)</sup>、それは単に発達段階が後ろ倒しになったということではなさそうであり、クラスに存在するグループは極めて親密な関係というよりもクラスでの孤立という負の側面を防ぐために仕方なく一緒にいるというような消極的な意味合いも含んでおり、そのために軋轢も生じやすいのではないかと考えられる。

そのような独特なグループという概念から派生して近年ではスクールカーストという概念が注目されたが、いじめにおけるグループの捉え方については更なる精査が必要と考えられた。スクールカーストが着目しているのはグループ間の序列構造であり、グループと他のグループとの関係性である。つまりグループという枠組みを用いているものの、グループ内には焦点化していなかった。一方で本研究からはグループの風土が軋轢を生みやすいことがうかがえており、経験的な指摘でもグループ内のいじめの問題点が指摘されていること<sup>42)</sup>、またグループ内のいじめでは傍観者が自分が次のターゲットになることを恐れて、またはグループへの所属感を得るためにいじめに加担する傾向にあることが指摘されていることから<sup>43)44)</sup>、グループ間の構造ではなくグループ内の力動がいじめと関連があるのではないかと考えられる。



## 第4章 関係性攻撃に関する研究の概観

本章では日本で起こりやすかつ青年期に特徴的な関係性攻撃について、定義、発達的变化、心理社会的適応、介入の観点から概観する。

### A節 定義

関係性攻撃とは1995年に初めて提唱された攻撃行動の概念の1つであり、それ以前に提唱されていた身体的攻撃や言語的攻撃と対比するかたちで導入された。「意図的な操作や仲間関係にダメージを与えることによって、他者を傷つける行動」と定義され<sup>45)</sup>、仲間関係に危害を加える攻撃行動である。当初は女性が行うことが想定されたが、日本では青年期において性差は示されていない<sup>46)</sup>。具体的には「ある子に対して腹を立てると、仕返しのためにその子を仲間はずれにする」「言うことをきかないと、嫌いになるよ」とおどす」「ある子に対して腹を立てると、その子を無視したり話しかけるのをやめたりする」「活動や遊び時間に、ある子を自分のグループに入れられないようにする」という攻撃行動が含まれる<sup>47)</sup>。また濱口・櫻井・桑原・設楽・渡辺<sup>48)</sup>は噂の流布、陰口、操作、同調、社会的排除、無視の6つの形態を示している。

以上から関係性攻撃は仲間関係にダメージを与える行為であり、関係性が密な場合によりダメージが大きいと考えられる。また攻撃行動の内容からは痕跡の残りづらいことがうかがえ、周囲からは気付かれにくいと考えられる。

### B節 発達的变化

攻撃行動は発達に伴って形態を変化させることが指摘されており、関係性攻撃は年齢が上がった青年期に特徴的な攻撃行動である。児童期の初期には身体的攻撃が多く、その後に言語的攻撃が増えるが<sup>49)</sup>、それらにとってかわるかたちで青年期に関係性攻撃が台頭する。

関係性攻撃が青年期にピークを迎える要因として、まず能力の発達が挙げられる。青年期には認知力が高度になり、抽象的、論理的な思考ができるようになってメタ認知が発達する<sup>50)</sup>。Card, Stucky, Sawalani, & Little<sup>51)</sup>は関係性攻撃は他者の精神状態を理解する力が必要であることを指摘しているが、関係性攻撃を行うためには他者の認知状態を推論したり関係性の先を見通すメタ的な視点が必要である。そのような能力が備わってくる青年期において、関係性攻撃を行うこと

ができるようになると考えられる。

また周囲からの影響も関係性攻撃が青年期にピークを迎える要因として挙げられる。青年期になると身体的攻撃が親や友達から受け入れられなくなることが指摘されており<sup>51)</sup>、親、教師、友達からの否定的な評価を避けるために関係性攻撃を用いるようになると考えられる。

また青年期における関係性の変化も要因として挙げられる。児童期までは親との関係が大切であるが、青年期は情緒的なサポートを得る相手が親から友達に移行していく時期である<sup>52)</sup>。そのため友達との関係性がより重要になり、そのような中で関係の軋轢が増加して関係性攻撃に繋がる可能性が考えられる。

以上から関係性攻撃は発達の側面を基盤とした攻撃行動であり、発達の成長に伴う他者の理解を背景としたより巧妙な攻撃行動であることがうかがえる。

### C節 心理社会的適応との関連

前述の通りいじめは被害者と加害者の双方に不適応を及ぼすが、関係性攻撃も例外ではない。例えば被害者では関係性攻撃と内在化問題との関連が示されており、抑うつ、孤独感、自尊感情の低下との関連<sup>53)</sup>、自殺念慮のようなより深刻な問題との関連が示されている<sup>54)</sup>。さらに関係性攻撃の被害は身体的攻撃と比較しても内在化問題と強い関連があることが示されており<sup>55)</sup>、関係性攻撃の被害者は強い内在化問題を抱える傾向にあると考えられる。

また関係性攻撃の被害は外在化問題との関連も指摘されている。例えば非行や攻撃性との関連<sup>56)</sup>、たばこやアルコールの使用、マリファナの使用と関連が示されている<sup>57)</sup>。このことから関係性攻撃の被害は内在化問題と外在化問題の両方に繋がると考えられる。

加害者についても孤独感や自尊感情の低下という内在化問題<sup>58)</sup>、行為障害や反抗挑戦性障害などの外在化問題に影響を与えることが示されている<sup>59)</sup>。以上から他のいじめ同様に関係性攻撃を受ける者も行う者もどちらも内在化、外在化双方の不適応の可能性があり、特に被害者は他のいじめ以上に強い影響がある可能性が考えられる。

### D節 介入

前節で示されたように関係性攻撃は心理社会的な不適応に影響を及ぼすために、諸外国では関係性攻撃を対象とした予防的なプログラムが開発されている。Leff, Waasdrop, & Crick<sup>60)</sup>は関係性攻撃の9個の介入プ

ログラムをレビューしている。そのうちの多くが小学生を対象としたものであったが、「Second Step」と「Sisters of Nia」は青年期を対象とするものであった。

「Second Step」は6年生から8年生を対象に行われ、ソーシャルコンピテンスを高めて衝動的な攻撃行動を減らすことを目指しており、関係性攻撃だけではなく身体的攻撃も対象となっている。効果としては介入群では有意に攻撃行動の容認が低下することが示されている<sup>61)</sup>。

「Sisters of Nia」はアフリカ系アメリカ人の中学生の女子生徒を対象に開発されたプログラムであり、関係性攻撃を減らすことに焦点が当てられているが、民族アイデンティティやジェンダーに関する内容も含まれていることが特徴的である。効果としては介入群では関係性攻撃が有意に低下することが示されている<sup>62)</sup>。

このようにこれらのプログラムは効果は示されているものの、Leff et al.<sup>63)</sup>は Society for Prevention Research が示す基準は満たしていないことを指摘しており、よりシステムティックな検討が必要であることを示唆している。また日本でも関係性攻撃の介入プログラムの開発は行われているが、エビデンスが示された効果的なプログラムは提示されていない<sup>64)</sup>。このことから頑健な手続きかつ効果の高い関係性攻撃の介入プログラムの開発には現状至っていないことがうかがえる。

## E 節 まとめ

関係性攻撃に関する研究の概観からは、関係性攻撃は他のいじめ同様に被害者と加害者の双方に深刻な影響を及ぼす一方で、無視や排除に代表されるように部外者からは見えづらい攻撃行動であることがうかがえた。また関係性攻撃を行うためにはメタ認知を用いた状況に対する多面的な理解が必要であり、発達段階が上がることで可能となる巧妙な攻撃行動であると考えられ、この点からも介入する教師には実態がわかりづらいうかがえる。

一方で関係性攻撃は攻撃行動の中では周囲から認められやすいものであり、関係性攻撃を行うことはむしろ発達のには成長であると捉えられるというような、ある種プラスの側面があると考えられる。実際関係性攻撃は身体的攻撃などと比べて教師から深刻と捉えられづらいことが示されており<sup>65)</sup>、悪いものであるという認識が他の攻撃行動よりも持ちづらい可能性がうかがえる。

このように関係性攻撃は外から見えづらく、かつ捉え方も難しく、介入が難しい攻撃行動であることがう

かがえる。しかし現状は効果的な予防プログラムも存在せず、現場での二次予防や三次予防に任されていると考えられる。

## 第5章 考察

### A 節 グループにおける関係性攻撃

ここまでグループと関係性攻撃のそれぞれについて研究の動向を概観してきた。以下ではそれぞれの内容を総合して関係性攻撃をグループという視点から捉えることの可能性について検討を行う。

グループに関する研究の概観からはクラスの中にはグループと呼ばれる集団があり、グループは軋轢が生じやすい環境であるが、これまでグループという視点からのいじめの検討は少なかったことがうかがえた。スクールカーストへの注目によりいじめとグループの関連が検討されるようになってきたが、グループ間の構造への着目にとどまっており、グループ内の力動の検討には至っていない状況である。

また関係性攻撃の研究の概観からは、関係性攻撃の被害者は他の攻撃行動よりも心理社会的不適応につながりやすい可能性がうかがえた<sup>66)</sup>。これは被害者にとっての関係性攻撃の深刻さを示唆していると考えられるが、本研究からはなかでも関係性が密なものからの関係性攻撃はより深刻であることがうかがえた。このことから中高生が学校生活の基盤としているグループの中での関係性攻撃は被害者へのダメージが大きいと考えられ、被害者へのケアをはじめとした適切な対応が必要だろう。このことから関係性攻撃においてグループという枠組みを導入することで、より被害者へのダメージが大きく適切な介入が必要ないじめに焦点化できるのではないかと考える。

また関係性攻撃は心理社会的不適応に強く影響する一方で、介入は現場に任されている。このことから教師の対応は重要になるが、本研究からは関係性攻撃は発達を基盤としたより巧妙な攻撃行動であり、教師からは実態がわかりづらく、深刻さを把握しづらいことがうかがえた。そのために教師の視点からの一面的な理解では介入が難しく、より生徒に近い視点での理解が必要であると考えられる。生徒がクラスを捉える際に用いているグループという視点から関係性攻撃を捉え、教師の視点では捉えることが難しかった点を補うことができるのではないかと考える。

以上から関係性攻撃をグループの視点から捉え、その内部の力動に着目することで、これまで見逃されて

きた被害者に深刻な影響を及ぼすいじめに着目することができ、いじめの多面的な理解につながるのではないかと考えられる。さらにグループ内でのいじめでは傍観者が加担者になりやすいことが示されていることから<sup>67)68)</sup>、グループの内部に着目することで傍観者アプローチの限界点も見えてくる可能性もうかがえる。以上からいじめ、特に関係性攻撃においてはグループ内部の問題としていじめを捉えることは効果的であり、傍観者を仲裁者に変えるという一面的なアプローチではなく、より力動を重視した多面的なアプローチを検討することができるのではないかと考える。

## B節 本研究の限界

本研究ではいじめについてグループという視点から捉えることの可能性を検討することを目的としていたため、ナラティブレビューの方式を採用した。そのために多様な視点からの文献の収集が可能であったが、文献収集における恣意性は免れないと考えられる。そのため今後は本研究を手掛かりとしつつも、明確な基準に基づいた整理を行う必要があると考えられる。

## 引用文献

- 1) Lereya, S.T., Copeland, W.E., Costello, E.J., & Wolke, D. 2015. "Adult mental health consequences of peer bullying and maltreatment in childhood: two cohorts and two countries." *Lancet Psychiatry*2: 524-531.
- 2) 大坊郁夫・奥田秀宇 編集 1996.『親密な対人関係の科学』誠信書房, pp.89-116.
- 3) 齋藤耕二・菊池章夫 編集 1990.『社会化の心理学/ハンドブック』川島書店, pp.283-296.
- 4) 文部科学省 2013.「いじめ防止等のための基本方針」Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afidfile/2019/06/26/1400030\\_007.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afidfile/2019/06/26/1400030_007.pdf) (2022年9月20日)
- 5) 文部科学省 2021.「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上に諸課題に関する調査結果について」Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt\\_jidou01-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf) (2022年9月20日)
- 6) 同上.
- 7) 下田芳幸 2014.「日本の小中学生を対象としたいじめに関する心理学的研究の動向」『教育実践研究：富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』第8巻, pp.23-37.
- 8) 土田昭司 1996.「『いじめ』問題についての教育心理学的考察」『明治大学教職課程年報』第18巻, pp.28-39.
- 9) 岡安孝之・高山巖 2011.「中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス」『教育心理学研究』第48巻, 第4号, pp.410-421.
- 10) Islam, M., I., Khanam, R., & Kabir, E. 2020. "Bullying victimization, mental disorders, suicidality and self-harm among Australian high schoolchildren: Evidence from nationwide data." *Psychiatry Research*292: 1-9.
- 11) Pengpid, S., & Peltzer, K. 2019. "Bullying victimization and externalizing and internalizing symptoms among in-school adolescents from five ASEAN countries." *Children and Youth Services Review*106: 1-7.
- 12) Sigurdson, J. F., Undheim, A. M., Wallander, J. L., Lydersen, S., & Sund A. M. 2015. "The long-term effects of being bullied or a bully in adolescence on externalizing and internalizing mental health problems in adulthood." *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 9: 1-13.
- 13) Wang, J. M., Duong, M., Schwartz, D., Chang, L., Luo, T. 2014. "Interpersonal and personal antecedents and consequences of peer victimization across middle childhood in Hong Kong." *Journal of Youth Adolescence*43: 1934-1945.
- 14) Pengpid, S., & Peltzer, K., 前掲 (2019).
- 15) 村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊恵・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次 2015.「いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性」『発達心理学研究』第26巻, 第1号, pp.13-22.
- 16) Lee, K., S., & Vaillancourt, T. 2019. "A four-year prospective study of bullying, anxiety, and disordered eating behavior across early adolescence." *Child Psychiatry & Human Development*50: 815-825.
- 17) Da Silva, M. A., Gonzalez, J. C., Person, G. L., & Martins, S. S. M. 2020. "Bidirectional associations between bullying and perpetration and internalizing problems among youth." *Journal of Adolescent Health*66(3): 315-322.
- 18) 森田洋司・清永賢二 1986.『いじめ 教室の病い』金子書房.
- 19) Salmivalli, C., Ladarespetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. 1996. "Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group." *Aggressive Behaviors*28: 246-158.
- 20) Salmivalli, C., Kärnä, A., & Poskiparta, E. 2011. "Counteracting bullying in Finland: The KiVa program and its effects on different forms of being bullied." *International Journal of Behavioral Development*35: 405-411.
- 21) 森田・清永, 前掲書 (1986).
- 22) Salmivalli, C., Ladarespetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A., 前掲 (1996).
- 23) 餅川正雄 2011.「学校のいじめ問題に関する研究 (Ⅲ)」『広島経済大学研究論集』第34巻, 第1号, pp.51-70.
- 24) 鈴木康平 2000.『学校におけるいじめの心理』ナカニシヤ出版.
- 25) 山中一英 2009.「『学級集団と友人関係』をめぐる諸問題への社会心理学的接近」『兵庫教育大学研究紀要』第34巻, pp.23-34.
- 26) 石田靖彦・小島文 2009.「中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連 ～仲間集団の形成・所属動機という観点から～」『愛知大学研究報告』第58巻, pp.107-113.
- 27) 武蔵由佳・河村茂雄 2015.「小・中学生のグループ状態認知尺度の作成 ―グループに所属する理由および被害者との関連の検討―」『カウンセリング研究』第48巻, 第3号, pp.133-146.
- 28) 石田・小島, 前掲 (2009).
- 29) 多和沙織 2012.「高校生女子の友人グループの排他性について



- て」『心理相談センター年報』第 8 巻, pp. 37-44.
- 30) 須藤春佳 2014. 「友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係」『神戸女学院大学論集』第 61 巻, 第 1 号, pp. 113-126.
- 31) 幸本香奈 2015. 「中学生・高校生女子の友人グループ: グループの果たす役割とグループ関係の発達的变化についての考察」『生涯発達心理学研究』第 7 巻, pp. 27-37.
- 32) 野里有希・横山剛 2014. 「中学生の仲間集団の特徴と拒否不安および事故表明との関連」『文京学院大学人間学部研究紀要』第 15 巻, pp. 259-271.
- 33) 石田・小島, 前掲 (2009).
- 34) 杉田綾香・松永しのぶ・河野義章 2020. 「青年期における友人グループに所属する理由—学校段階, 性別による検討—」『学苑・人間社会学部紀要』第 952 号, pp. 1-10.
- 35) 保坂亨・岡村達也 1986. 「キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討」『心理臨床学研究』第 4 巻, pp. 15-26.
- 36) 保坂亨 2010. 『いま, 思春期を問い直す—グレイゾーンにたつ子どもたち—』東京大学出版会
- 37) Sullivan, H. S. 1953. *Conception of modern psychiatry*. New York: W. W. Norton. (中井久夫・山口隆吉・高木敬三・鱸幹一郎 (訳) 1976. 『現代精神医学の概念』みすず書房)
- 38) 鈴木翔 2012. 『教室内 (スクール) カースト』光文社新書
- 39) 森口朗 2007. 『いじめの構造』講談社新書
- 40) 水野君平・加藤弘通・太田正義 2019. 「中学生のグループ間の地位といじめ被害・加害の関係性の検討」『対人社会心理学研究』第 19 巻, pp. 14-21.
- 41) 保坂, 前掲書 (2010).
- 42) 鈴木, 前掲 (2000).
- 43) Adler, P. A., & Adler, P. 1995. "Dynamics of inclusion and exclusion in preadolescent clique." *Social Psychology Quarterly* 58: 145-162.
- 44) Garandeau, C. F. & Cillessen, A. H. N. 2006. "From indirect aggression to invisible aggression: A conceptual view on bullying and peer group manipulation." *Aggression and Violent Behavior* 11 (6): 612-625.
- 45) Crick, N. R. & J. K. Grotpeter 1995. "Relational Aggression, Gender, and Social-Psychological Adjustment." *Child Development* 66(3): 710-722.
- 46) 関口雄一・濱口佳和 2014. 「多次元性関係性攻撃尺度 (高校生用) の作成」『筑波大学心理学研究』第 47 号, pp. 55-63.
- 47) Crick, N. R. & J. K. Grotpeter, 前掲書 (1995).
- 48) 濱口佳和・櫻井茂雄・桑原千明・設楽紗英子・渡辺弥生 2012. 「関係性攻撃と心理社会的適応との関連(9)—多次元性関係性攻撃尺度 (職場成人用) の構成—」『日本心理学会第 76 回発表論文集』p. 1032.
- 49) Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1998. "Aggression and antisocial behavior." In W. Damon & N. Eisenberg, *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development*. New York: Wiley.
- 50) 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 編集 2016. 『新・発達心理学ハンドブック』福村出版, pp. 293-313.
- 51) Card, N. A., Stucky, B. D., Sawalani, G. M., Little, T. D. 2008. "Direct and indirect aggression during childhood and adolescence: A meta-analytic review of gender differences, intercorrelations, and relations to maladjustment." *Child Development* 79(5): 1185-1229.
- 52) Hazan, C. & Zeifman, D. 1994. "Sex and the psychological tether." *Advances in Relationships* 5: 151-177.
- 53) Prinstein, M. J., Boergers, J., Vernberg, E. M. 2001. "Overt and relational aggression in adolescents: Social-psychological adjustment of aggressors and victims." *Journal of clinical psychology* 30(4): 479-491.
- 54) Klomek, A., B., Barzilay, S., Apter, A., Carli, V., Hoven, C. W., Sarchiapone, M., Hadlaczky, G., Balazs, J., Keresztesy, A., Brunner, R., Kaess, M., Bobes, J., Saiz, P., A., Cosman, D., Haring, C., Banzer, R., MaMahon, E., Keeley, H., Kahn, J., Postuvan, V., Podlogar, T., Sisask, M., Varnik, A., & Wassrman, D. 2018. "Bidirectional longitudinal associations between different types of bullying victimization, suicide ideation/attempts, and depression among a large sample of European adolescents." *The journal of child psychology and psychiatry* 60(2): 209-215.
- 55) Casper, D. M., & Card N. A. 2017. "Overt and relational victimization: a meta-analytic review of their overlap and associations with social-psychological adjustment." *Child development* 88 (2): 466-483.
- 56) Kawabata, Y., & Tseng, W. L. 2018. "Relational and physical victimization, friendship, and social and school adjustment in Taiwan." *Journal of Social and Personal Relationships* 36(6): 1559-1578.
- 57) Sullivan, T. N., Farrell, A. D., & Klierer, W. 2006. "Peer victimization in early adolescence: Association between physical and relational victimization and drug use, aggression, and delinquent behaviors among urban middle school students." *Development and Psychopathology* 18: 119-137.
- 58) Moreno D., Estévez E., Murgui S., & Musitu G. 2009. "Social reputation and relational violence in adolescents: the role of loneliness, self-esteem, and life satisfaction." *Psicothema* 21: 537-542.
- 59) Aizpitarte, A., Atherton, O. E., & Robins, R. W. 2017. "The co-development of relational aggression and disruptive behavior symptoms from late childhood through adolescence." *Clinical Psychological Science* 5(5): 866-873.
- 60) Leff, S. S., Waasdorp, T. E., & Crick, N. R. 2010. "A review of existing relational aggression programs: Strengths, limitations, and future directions." *School Psychology Review* 39(4): 508-535.
- 61) Van Schojack-Edstrom, L., Frey, K. S., & Beland, K. 2002. "Changing adolescents' attitudes about relational and physical aggression: An early evaluation of a school-based intervention." *School Psychology Review* 31: 201-216.
- 62) Belgrave, F. Z., Reed, M. C., Plybon, L. E., Butler, D. S., Allison, K. W., & Davis, T. 2004. "An evaluation of sisters of Nia: A cultural program for African American girls." *Journal of Black Psychology* 3: 329-343.
- 63) Leff, S. S., Waasdorp, T. E., & Crick, N. R., 前掲 (2010).
- 64) 永井明子・山崎勝之 2015. 「児童の関係性攻撃適正化を目指す教育的介入の開発に向けて—基礎研究からそのあり方をデザインする—」『ブール学院大学研究紀要』第 56 巻, pp. 305-320.
- 65) Maunder, R. E., Harrop, A., & Tattersall, A. J. (2010). "Pupil and staff perceptions of bullying in secondary schools: comparing behavioural definitions and their perceived seriousness." *Educational Research* 52 (3): 263-282.
- 66) Casper, D. M., & Card N. A., 前掲, (2017).



67) Adler, P. A., & Adler, P., 前掲, (1995).

68) Garandeau, C. F. & Cillessen, A. H. N., 前掲, (2006).

(指導教員 高橋美保教授)